

生成文法理論に基づく第一言語獲得研究

Language Acquisition and Generative Grammar

村杉 恵子 (MURASUGI Keiko)

1. はじめに

人間言語はどのようなメカニズムをもち、それはどのように獲得されるのか。世界の言語は、人間の生物学的特性を反映するものであるから、共通する特性を多く担う。しかし同時に、世界の言語は異なってもいる。そして言語間の相違もまた、人間言語の特性を反映する。母語の特性や言語にある普遍性 (universality) や変異性 (variations) は、いずれも基本的には普遍文法によって規定されている。

Chomsky (1981) は、文法体系は普遍文法の一部として生物学的に規定された「全ての言語に共通する原理」と「言語間の違い (言語の多様性) を制限するパラメーター」から成ると考えている。人間言語の多様性は (複数の値を持つ) パラメーターとして、人間の生得的な言語のメカニズムの中で規定され则认为られている。

本プロジェクトは、生成文法理論のもとで、日本語の大人の文法を分析し、それに関連する日本語を母語とする幼児の言語獲得のプロセスを研究することで、人間の心のメカニズムがいかに説明されうるかに関して、理論と実証の両面から研究を行っている。本稿では、本プロジェクト研究の中核となる言語獲得の論理的問題を整理しつつ、本研究で進めてきた内容のうち、日本語を母語とする幼児の文法獲得に関する実証的研究に焦点をあてて概観する。

2. 言語獲得の論理的問題

2.1 肯定情報を基に獲得される言語

親は、幼児に言語の規則を教えることはない。また、こどもが発話した形式に関して、それが非文法的であるとする情報 (直接否定情報) も母語獲得においては働かないと考えられている¹。

(1) こども : Nobody don't like me.

母 : No, say "nobody likes me."

こども : Nobody don't like me.

¹ 本稿では、引用に際して、原文のカタカナ表記を漢字かなまじりにするなど、整理したところがある。

⋮
(この会話を8回繰り返す)

母： No, now listen carefully; say “*nobody likes me.*”

こども： Oh! Nobody don't likes me. (McNeill 1966；イタリックは原文)

(2) こども： パパ，風船，膨らんで！（パパ，風船を膨らませて）

父： 膨らんで，じゃないでしょ！「膨らまして」でしょ！

こども： 膨らませて

（父が膨らませて手渡す。間もなくして，別の風船を持って来て）

こども： 膨らんで！（膨らませて）（鈴木 1987）

(1) ならびに (2) で，親が与えているのは，言語に関する規則ではなく，母語において文法的な文である。親が，直接的に，当該の文が非文であるというメタ言語的なコメントを与えたとしても，こどもには伝わらない。第一言語獲得においては，本質的に直接否定情報は働かないのである。

2.2 異なる言語環境のもとで短期間に到達する等質の文法

聾者も聴者も，母語となる言語の入力を自然な環境で与えられれば，同じような発達段階を経て，5歳ほどまでに母語の中核的な文法特性を獲得する。全く異なる言語環境で育つこどもたちが到達する母語には，その文法に個人差がない。言語の複雑さに鑑みると，言語獲得のスピードは速い。なぜ，人は，短期間に，異なる入力をもとにしながら，等質の文法に至るのか。

2.3 刺激の貧困

言語獲得の第三の論理的問題は，刺激の貧困についてである。人に与えられる入力と出力には，質的な差があり，幼児が受ける刺激は，質的にも量的にも十分なものではない。

第一に，母語の文法を獲得するまでに直接与えられるインプット（入力）は，有限個である。一方，人が産出しうるアウトプット（出力）は無限である。人は，限られた文を聞いただけで，なぜ，聞いたこともない文を理解し，生成できるようになるのか。

第二に，入力される文は，完全な文あるいは文法的な文とは限らない。途切れた文も含まれれば，言い間違えも含まれるにも拘らず，幼児は等質の大人の文法に到達する。

第三に，母語の文法には，肯定情報としては存在しないと思われる言語現象もある。

(3) a. 太郎は「花子は何を買ったと」思っているの？

b. *太郎は「花子は何を買ったかどうか」知りたがっているの？

(3a) は文法的であり、たとえば、答えは「ぶどう」である。しかし (3b) は「何を」の内容を尋ねる疑問文として非文である。(3b) の非文法性を直接的に示すような言語経験は、肯定情報の中から得られることはあるだろうか。これについては、3 節で詳細に扱う。

第四に、刺激として言語環境から与えられたとは考えにくい形式をも、こどもは自発的に作り出す。日本語を母語とする幼児は、言語獲得の過程で、大人の文法とは異なる文を産出することがある。形容詞、形容動詞、連体修飾節の後に「の」を「誤って」挿入する。

- (4) a. 黒い*のクック (= 黒いエナメルの靴)
 b. 意地悪な*のおばちゃん (= 意地悪なおばちゃん, シンデレラの継母)
 c. ごはん食べてる*のバーバ (= ごはんを食べている象のババール)
 d. うさちゃん食べてる*のにんじん (= うさぎが食べているにんじん)

親から学んだとは考えにくい不思議な「の」を、幼児は自然に発話する。この「の」は何か。なぜ「の」が過剰生成されるのか。これについては、4 節で詳細に扱うことにしよう。

文法が、単なる模倣や強化によって獲得されたものでないことは、親が与えるとは考えにくい(普遍的な)制約や、幼児が共通して産出する「大人の文法では許されない誤用」の存在からも示される。3 節・4 節では、言語獲得の論理的問題に関して、本プロジェクトが取り組んだ二つの研究事例を概観する。

3. 移動にかかる制約の獲得

生成文法理論においては、母語知識の獲得は、(i) 獲得可能な言語の類を規定した生得的な仕組みである「普遍文法」(Universal Grammar (UG)) と、(ii) 生後外界から取り込まれる言語経験との両者の相互作用により達成されると仮定されている。生成文法理論に基づく母語獲得研究は、UG に含まれると仮定される属性に関し、それらが幼児の言語知識に反映されていることを実験的に示すことにより、UG の存在に対する重要な証拠を与え続けてきた。

その一つに、*wh* 疑問文 (に含まれる依存関係) に対する制約の獲得がある。杉崎・村杉 (2013) で述べるように de Villiers, Roeper and Vainikka (1990) は、英語を母語とする 3~6 歳児が (5) のような *wh* 疑問文を与えられた際、*wh* 句である *how* を、埋め込み節内の *paint* と結びつけて解釈せず、主節の *ask* と結びつけて解釈することを実験的に示し、(6a) において間接疑問文からの移動を禁ずる「*wh* 島制約」(*wh*-island constraint) が、母語獲得の観察しうる最初期から言語知識の中にも存在すると論ずる。

- (5) How did the girl ask [who to paint]?
 (6) a. *How₁ did the girl ask [who to paint *t*₁]?
 b. How₁ did the girl ask [who to paint] *t*₁ ?

(3) に見たように、(少なくとも顕在的には) 義務的な *wh* 移動を持たない日本語におい

ても、英語における *wh* 島制約と同様の効果が見られる (Watanabe 1992, 他)。

(3) の非文法性を直接的に示しうる言語経験が全ての幼児に必ず手に入るとは考えにくいことを考慮すると、(3b) を非文とする制約は、UG の属性を反映したものである可能性が高い。もしそうであるならば、日本語を母語とする幼児の持つ言語知識は、観察しうる最初期からこの制約に従う体系になっていることが予測される。本プロジェクトにおいて、杉崎・村杉 (2013) は、この間接疑問文からの移動を禁ずる *wh* 島制約が日本語を母語とする 3~6 歳児の言語知識に存在することを実証的に示している。

4. 「の」の過剰生成

4.1 3 種類の「の」の過剰生成

日本語を母語とする幼児が、1 歳頃から 4 歳頃の間、(4) や (7) で示するような「の」を過剰生成することは広く知られている (「2;1」は「2 歳 1 ヶ月」を表す)。

- (7) a. ほわし 大きい *の ほわし (=お箸) (2;1) (永野 1960)
 b. まあるい *の うんち (2;0) (横山 1990)
 c. ゆうたが あしょんでる *の やちゅ は これ、これ。 (ゆうた 2;3)
 (Murasugi, Nakatani and Fuji 2009)

(7a) と (7b) は形容詞と名詞句の間に「の」が表れる例であり、2 歳前後に観察される。(7c) は複合名詞句内に「の」が表れる例で、2 歳から 4 歳の間観察される。

大人の文法では「の」には 3 種類あり、英語の *'s* に相当する属格 (例：山田の本), *one* に相当する代名詞 (例：赤いの)、そして分裂文において前提節の主要部 *that* に相当する補文標識 (例：えみが初めてロブスターを食べたのはボストンでだ) が存在する (Murasugi 1991)。

過剰生成の「の」が何かについては、長く言語獲得研究の謎として議論され、大人の文法分析に基づき、属格仮説、代名詞仮説、そして補文標識仮説が提案されてきた。三つの仮説が乱立する根拠の一つには、これらの仮説が依って立つ過剰生成の観察される記述 (時期と特徴) が異なる点がある。過剰生成が観察される時期は長く、1 歳から 2 歳 (永野 1960, 他) とする観察もあれば、4 歳ですら見られる (Murasugi 1991, 他) とする観察まである。本稿では、縦断的観察とコーパス分析をもとに、単一の現象に見える「の」の過剰生成が、実は三つの独立した原因によるものであるとする研究成果を概観する。

4.2 補文標識仮説：連体修飾節の構造のパラメーター (Murasugi 1991)

Murasugi (1991) は、2 歳から 4 歳の長期にわたる実験・観察的調査をもとに、過剰生成される「の」は補文標識であり、それは世界の言語の連体修飾節構造の多様性によって生じると提案する。Murasugi (1991) の議論の根拠の一つは、富山方言と韓国語の大人の文法と幼児の言語獲得の分析に基づく。富山方言の大人の文法では補文標識は「が」、属格は「の」

であり、韓国語では補文標識は *kes*、属格は *uy* である。そしてそれぞれの言語を母語とする幼児に過剰生成されるのは補文標識「が」・*kes* である。

- (8) a. アンパンマン 付いとる *が コップ (富山方言, ケン 2;11, Murasugi 1991)
 b. ACESSI otapai tha-nun *kes soli ya. (韓国語, 2-3 years old, Kim 1987)
 uncle motorcycle riding-is KES sound is
 ‘Lit. (This) is the sound that a man is riding a motorcycle.’

属格は、富山方言では「の」、韓国語は *uy* であるから、ここで過剰生成されている要素は属格ではありえない。また、もし、この要素が代名詞であるのなら、この段階の幼児は名詞的要素と名詞的要素の間に「大人と同様に」属格の「の」を挿入できていることから、たとえば、富山方言を母語とする幼児が発話すると予測される名詞句は、「アンパンマン 付いとる *が の コップ」となることが予測されるが、実際には幼児はそのようには産出しない。したがって、このとき幼児が過剰生成している要素は、補文標識であると考えられ、幼児は英語と同じ（語順は異なる）連体修飾節の構造を仮定していることになる。

言語には連体修飾節構造に関するパラメーターが存在し、世界の言語には、連体修飾節を導く補文標識を持つ値（英語など）とそれを持たない値（日本語・韓国語など）がある。後者の言語を母語とする幼児（2歳から4歳頃）は、連体修飾節を導く補文標識を持つ連体修飾節を仮定し、自身の到達言語とは異なる構造を設定する段階があり、これが過剰生成の理由であると分析される。このような分析により、過剰生成された「の」が何かだけではなく、なぜ、「の」が過剰生成されるのかという問いが、原理とパラメーター理論の下で説明されうると提案している。

ところが、Murasugi (1991) の仮説では、説明しきれない観察が残されている。それは永野 (1960) の観察にある。永野 (1960) によれば、過剰生成の「の」は二語文の段階（1歳代頃）に見られ、この段階では属格も時制 (T) や補文標識 (C) に関連した要素も、発話には顕在化していない。

4.3 代名詞仮説

永野 (1960) は、属格の「の」が2歳2ヶ月で表れ始める前に、(9) に示すように代名詞の「の」が表れ、同時に (10) に示すような過剰生成の「の」が観察されるとしている。

- (9) a. 大きい~~の~~。 (2;1)
 b. ちっちゃい~~の~~。 (2;1) (永野 1960)
 (10) a. ほわし 大きい *~~の~~ ほわし (=お箸) (2;1)
 b. アムナ ちっちゃい *~~の~~ アムナ (=自分の名前「はるみ」の不完全発音) (2;1)
 (永野 1960)

永野（1960）は、自身の縦断的観察として、この「の」の過剰生成の時期には、代名詞の「の」のみが産出され、名詞句内で属格挿入をしないことから、この「の」は属格ではないと提案する。更に、Murasugi and Hashimoto（2004）、村杉・橋本（2006）、Murasugi, Nakatani and Fuji（2009）は、独自の複数の縦断的観察により、永野（1960）の提案する発達過程を裏付けている²。

4.4 属格仮説

更に、Murasugi, Nakatani and Fuji（2009）では、上記の二つの仮説のみでは説明しきれない観察が残されていることを指摘する。それは、特定の形容詞の後にのみ過剰生成の「の」が観察されるとする横山（1990）に指摘される事実である。この事実についても、Murasugi, Nakatani and Fuji（2009）は、彼らの複数の独自の縦断的観察とコーパス分析から裏付けている。

- (11) a. 新しい*の 紙 (ゆうた 1;11)
 b. 白い*の ご飯 (ゆうた 2;0)
 c. 小さい*の ぶうぶう 通った よ。 (スミハレ 1;11)
- (Murasugi, Nakatani and Fuji 2009)

「ゆうた」の観察記録を注2と同様に PRAAT によって分析した結果、この段階では、代名詞の場合とは異なり、「の」と名詞句の間にポーズ（間）はない。また、この時期には、属格の「の」は、名詞的要素と名詞句との間に（大人の文法と同様に）挿入されている（例：ばくのぶうぶう）。そして、この段階では、複合名詞句や分裂文も観察されないことから、この「の」が補文標識である可能性は考えにくい。

横山（1990）は、属格の「の」が色、大きさ、形等に関する形容詞と共起するという観察を報告している。Murasugi, Nakatani and Fuji（2009）は、日本語を母語とする幼児の事実を精査し、この横山（1990）が観察するとおり、色、大きさ、形、状態といった特定の形容詞が使われる時のみ、この「の」の過剰生成が見られ、一方、「痛い」「重い」「怖い」などの形容詞は、時制を伴って叙述的に表われ、「の」の過剰生成を伴う事もないことを報告している。

- (12) a. おいしい、これ。おいしい、これ。 (ゆうた 1;10)
 b. ここ ばばちい よね。 (スミハレ 2;0)
 c. お母ちゃん ぼんぼ（＝胃） いたい の？ (スミハレ 2;0)
- (Murasugi, Nakatani and Fuji 2009)

² PRAAT (Boersma and Weenink 2009) による分析により、「ゆうた」の言語獲得の初期の段階で見られる「の」と指示的名詞句の間にはポーズ（間）があることが確認されるが、一方、2歳以降の複合名詞句内の補文標識の「の」の過剰生成の場合にはこのポーズ（間）は見られない。1歳から2歳にかけて見られる代名詞の「の」は文法上の誤用ではなく、二語文の段階のこどもの発話上（の限界）の特性と併合の獲得途上の特徴を示すものであり、したがって、代名詞の「の」の後にポーズ（間）があると本プロジェクトでは分析している。

これらの記述的一般化から、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009) は、なぜこのような奇妙な一般化が見られるのかを問い、幼児が形容詞を大人とは異なる範疇で捉えている段階があると分析する。色や形のような形容詞は名詞的（名詞的形容詞）であり、したがって属格の「の」を伴う。一方、属格挿入を伴わない形容詞は動詞的（動詞的形容詞）であると提案している。

この仮説は、名詞的形容詞の過去形が現在形よりも遅く表れるのに対し、動詞的形容詞の過去形は早く表れること、また、「の」の過剰生成を伴う名詞的形容詞は、指示的名詞としても、項の位置に（時に格を伴って）表れることなどから裏付けられている。

- (13) a. *黄色い と *赤い と (スミハレ 2;9)
 b. *小さい こおて (=買って) や (スミハレ 2;7)
 (14) *ちっちゃいが あって, *まあいるが あって…こんな *大きい が あって…
 (ゆうた 2;2) (以上, Murasugi, Nakatani and Fuji 2009)

(13a) の形容詞「黄色い」「赤い」はそれぞれ「黄色いクレヨン」「赤いクレヨン」、(14b) の「小さい」は「小さい犬」を指している。横山 (1990) にはじまる記述的一般化は、形容詞という統語範疇の獲得の困難さによるものであると分析される。

色、大きさ、形を表す形容詞は他の情緒的、評価的な形容詞と異なり具体名詞に通ずる特徴を持ち (Berman 1988, Mints and Gleitman 2002), de Villiers and de Villiers (1978) は、こどもが大きさ、形、色を表す形容詞を一つのグループとして捉えていると論ずる。更に、形容詞は「流動的範疇」とされ習得が難しいとする論もある (Gassar and Smith 1998, Berman 1988, Polinsky 2005, 他)。実際、日本語の形容詞は名詞と同様「です」に前置し、一方で動詞と同様に時制を伴い活用することから、形容詞としての統語的手がかりは、肯定情報において明確ではない。

過剰生成の「の」は、(i) 代名詞 (1 歳後半), (ii) 属格 (2 歳前後), (iii) 補文標識 (2 歳から 4 歳) の三つの段階を含み、過去に提案されてきた仮説は、基本的に全て正しいといえるだろう。言語理論上「過剰生成」といえるのは連体修飾節の構造のパラメーターの設定による連体修飾節を導く補文標識の場合のみである。他の「の」は、併合操作や形容詞の統語範疇の獲得に起因し、「の」そのものの文法としては大人のそれと齟齬がないものと考えられる。

60 年に及んで議論されてきた「の」の過剰生成の問題は、記述においてすら矛盾を孕む混乱の中にあった。その問題の根幹には、この過剰生成が単独の現象と信じられていたことがある。また、日本語のみを研究対象とし、この「の」が何かに焦点があてられ、「の」がなぜ過剰生成されるかは問われない傾向にあったことも、混乱の原因であるといえるだろう。

本節で概観した幼児が見せる「誤用」もまた、言語の本質を理解するために、日本語（並びに韓国語）であるからこそ見える重要な鍵となるだろう。生成文法（言語理論）の下で、それは何か（“what” question）、どう獲得されるか（“how” question）という問いのみならず、「なぜ」（“why” question）を問い、一定の基準のもとに他言語と比較検討するとき、人類の心に

在る文法の重要な特性を、日本語の「の」は、見せてくれる。

5. 結びにかえて：自然科学としての「幼児の誤用」

幼児は無意識に普遍文法の道を辿る。

言語獲得研究において、普遍文法の特性が早期から獲得されていることが示される一方で、幼児の文法的な誤用は、普遍文法の制限の範囲内で起こりうることも明らかにされつつある。母語のパラメーターの値は、総じて早期に決定されるとは限らない。人間は、あらゆる言語の話者になりうるメカニズムを持って生まれ出ずるがゆえに、自身の母語に不必要な特性を仮定する過程も経うる。言語獲得の中間段階に、普遍文法に基づき母語とは異なる自然言語に許された文法値を仮定する段階があるとすれば、言語は学習や経験、構文パターンの推論のみにより習得されるのではない。そのとき、幼児は、世界の言語にある共通性と多様性を規定する生得的な抽象的システムと、言語環境にある母語の特性とを結びつけている段階にあるといえよう。日本語を母語とする幼児に観察される典型的な文法的誤用は、単なる「間違え」ではなく、自然言語に存在する普遍文法の範囲内で規定された（母語以外の）文法の特性が表れているとする分析を、本プロジェクトは提案するものである。

●参考文献●

- Berman, Ruth (1988) Word class distinctions in developing grammar. In: Yonata Levy, Izchak M. Schlesinger, and Martin D. S. Braine (eds.) *Categories and processes in language acquisition*, 45–72. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Boersma, Paul and David Weenink (2009) Praat: Doing phonetics by computer (Version 5.1.23) [Computer Program]. <http://www.praat.org/> (Retrieved October 31, 2009)
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding*. Foris: Dordrecht.
- de Villiers, Jill G. and Peter A. de Villiers (1978) *Language acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- de Villiers, Jill, Thomas Roeper, and Anne Vainikka (1990) The acquisition of long-distance rules. In: Lynn Frazier and Jill de Villiers (eds.) *Language processing and language acquisition*, 257–297. Dordrecht: Kluwer.
- Gasser, Michael and Linda B. Smith (1998) Learning noun and adjective meanings: A connectionist account. *Language and cognitive processes special issue: Language acquisition and connectionism* 13: 269–306.
- Kim, Young-Joo (1987) The acquisition of relative clauses in English and Korean: Development in spontaneous production. Unpublished doctoral dissertation, Harvard University.
- McNeill, David (1966) Developmental psycholinguistics. In: Frank Smith and George A. Miller (eds.) *The genesis of language: A psycholinguistic approach*, 15–84. Cambridge, MA: MIT Press.
- Mintz, Toben H. and Lila R. Gleitman (2002) Adjectives really do modify nouns: The incremental and restricted nature of early adjective acquisition. *Cognition* 84: 267–293.
- Murasugi, Keiko (1991) Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition. Unpublished doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004) Two different types of overgeneration of “no” in Japanese noun phrases. In: Hang-Jin Yoon (ed.) *Proceedings of the 4th Asian GLOW in Seoul*, 327–349. Seoul: Hankook.
- 村杉恵子・橋本知子 (2006) 「言語獲得における名詞句内での過剰生成」 *KLS proceedings* 26: 12–21. 関西言語学会。

- Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani, and Chisato Fuji (2009) A trihedral approach to the overgeneration of NO in the acquisition of Japanese noun phrase. Paper presented at the 19th Japanese/Korean Linguistics Conference, November 12–14, University of Hawaii.
- 永野賢(1960)「幼児の言語発達—とくに助詞『の』の習得過程について」『島田教授古稀記念国文学論集』405–418. 関西大学国文学会.
- Polinsky, Maria (2005) Word class distinctions in an incomplete grammar. In: Dorit D. Ravid and Hava Bat-Zeev Shyldkrodt (eds.) *Perspectives on language and language development*, 419–436. Dordrecht: Kluwer.
- 杉崎鉦司・村杉恵子(2013)「日本語における *wh* 島制約の獲得：予備的研究」村杉恵子（編）『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究，成果報告書 II』.
- 鈴木情一(1987)「幼児の文法能力」福沢周亮（編）『子どもの言語心理（2）幼児のことはば』141–179. 東京：大日本図書.
- Watanabe, Akira (1992) Subjacency and s-structure movement of *wh*-in-situ. *Journal of East Asian Linguistics* 1: 255–291.
- 横山正幸(1990)「幼児の連体修飾発話における助詞『ノ』の誤用」『発達心理学研究』1: 2–9.

《要旨》 本稿は、言語獲得の論理的問題を整理した上で、*wh* 島制約に関する研究と「の」の過剰生成に関する研究を紹介する。普遍文法の特徴が言語獲得の早期から獲得されている一方で、幼児の「誤用」は、普遍文法の制限の範囲内で起こることを理論的実証的に示す。このことにより、幼児の「正用」も「誤用」も、自然言語の特徴が表出した現象であることを示し、人間に備わる生得的な言語知識の実在性を、言語理論と言語獲得研究から裏付ける。

Abstract: Languages reflect the biological properties of human beings and therefore share common properties. At the same time, however, all languages differ. This project's aim is collaborative research on the adult syntax and first-language acquisition of Japanese from the perspective of Generative Grammar. In this paper, I first summarize the logical problems of language acquisition and then introduce our research on two phenomena: the *wh*-island constraint and the overgeneration of “no.” The former shows that children know some properties of Universal Grammar at a very early stage. The latter proposes that children’s “errors” occur within the limits of Universal Grammar and indicate how children test the grammar of natural languages other than their mother tongue.

村杉 恵子（むらすぎ・けいこ）

南山大学外国語学部教授。Ph. D.（言語学）（コネチカット大学）。金城学院大学助教授，教授を経て，1998年4月より現職。

主な著書・論文：『英語教育 21 世紀叢書シリーズ 英文読解のプロセスと指導』（共著，大修館書店，2002），The acquisition of Japanese syntax（共著，*The Oxford handbook of Japanese linguistics*, Oxford University Press, 2008），The intermediate stages in the grammar acquisition: A view from Japanese（単著，*Studies in Japanese and Korean linguistics: LINCOM studies in Asian linguistics*, LINCOM EUROPA, 2012）等。

領域指定型共同研究プロジェクト

「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究」

プロジェクトリーダー 村杉恵子（南山大学 外国語学部 教授）

プロジェクトの概要

日本語に関する理論研究の成果を詳細に検討し、それを踏まえ、文法の普遍的属性を反映していると思われる現象の獲得過程を横断的かつ実証的に分析することを主な目的とする。

①日本語に関する理論研究と実証的研究を行うことにより、これまで明らかにされていない現象の獲得過程を明らかにし、言語獲得理論の構築に寄与する。②日本語に関する理論研究を獲得の観点からも考察することにより、言語理論研究に対して示唆を与える。③広く知られている幼児の誤用（格の誤用、自動詞と他動詞・使役動詞の代替誤用、複合名詞句内の「の」の過剰生成等）に対し、理論的研究の成果に基づいた新たな示唆を与える。